

『外科室』

泉鏡花

「看護婦、メスを」

「ええ」と看護婦の一人は、目をみはりて猶予え
り。一同ひと齊ひとしく愕然がくぜんとして、医学士の面おもてを瞻みまもる
とき、他の一人の看護婦は少しく震えながら、消
毒したるメスを取りてこれを高峰に渡したり。

医学士は取るとそのまま、靴音くつおと軽く歩を移して
つと手術台きんせつに近接せり。

看護婦はおどおどしながら、

「先生、このままでいいんですか」

「ああ、いいだろう」

「じゃあ、お押え申しませう」

医学士はちよつと手を挙あげて、軽く押し留とどめ、

「なに、それにも及ぶまい」

謂う時はや疾くその手はすでに病者の胸を掻き開かけたり。夫人は両手を肩に組み、身動きだもせず。

かかりしとき医学士は、誓ちかうがごとく、深重しんちゆう厳肅げんしゆくたる音調もて、

「夫人、責任を負って手術します」

ときに高峰たかねの風采は一種神聖にして犯すべからざる異様のものにてありしなり。

「どうぞ」と一言答こたえたる、夫人が蒼白なる両の頬ほに刷はけるがごとき紅べにを潮ちゆうしつ。じつと高峰を見詰まなこめたるまま、胸に臨めるナイフにも眼まなこを塞ふさがんとはなさざりき。

と見れば雪の寒紅梅ちしお、血汐ちしおは胸よりつと流れて、さと白衣びやくえを染むるとともに、夫人の顔はもとのご

とく、いと蒼白あおしろくなりけるが、はたせるかな自若
として、足の指をも動かさざりき。

ことのここに及べるまで、医学士の挙動脱兎だつとの
ごとく神速しんそくにしていささか間かんなく、伯爵夫人の胸
を割なくや、一同はもとよりの医博士いたに到るまで、
言ことばを挟さしはさむべき寸隙すんげきとてもなかりしなるが、
ここにおいてか、わななくあり、面おもてを蔽おおうあり、
背向そがいになるあり、あるいは首くびを低たるるあり、予
のごとき、われを忘れて、ほとんど心臓まで寒く
なりぬ。

三秒セコンドにして渠かれが手術は、ハヤその佳境に進み
つつ、メス骨に達すと覚しきとき、

「あ」と深刻なる声を絞りて、二十日以来寝返り
さえもえせずと聞きたる、夫人は俄然がぜん器械のごと

く、その半身を跳ね起きつつ、刀取れる高峰が
右手の腕めて かいなに両手をしかと取り縋すがりぬ。

「痛みますか」

「いいえ、あなただから、あなただから」

かく言い懸かけて伯爵夫人は、がっくりと仰向あおむきつ

つ、凄冷極せうれいきわまりなき最後の眼まなこに、国手こくしゆをじつと

瞻みまもりて、

「でも、あなたは、あなたは、私わたくしを知りますま

い！」

謂おそうとき晩し、高峰が手にせるメスに片手を添

えて、乳の下深く搔き切りぬ。医学士は真蒼まっさおにな

りて戦おのきつつ、

「忘れません」

その声、その呼吸いき、その姿、その声、その呼吸いき、

その姿。伯爵夫人はうれしげに、いとあどけなき
微笑^{えみ}を含みて高峰の手より手をはなし、ぱったり、
枕に伏すとぞ見えし、唇^{くちびる}の色変わりたり。

そのときの二人が状^{さま}、あたかも二人の身边には、
天なく、地なく、社会なく、全く人なきがごとく
なりし。

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストをもとに
しています（一部加工しています）。

「青空文庫」<http://www.aozora.gr.jp/>